



オピニオン
人新世に考える (2)
 SCE・Net 中安 一雄

O-30
 発行日：
 2024年8月31日

本稿は「人新世に考える (1)」に続くものです。

3 思想の限界

人はいろいろな考え方をしながら社会活動を行っている。それらにはプラスの面があるがマイナスの面もある (表-2)。

表-2 思想のプラスとマイナスの例

主義	プラス面	マイナス面
資本主義	利益と成長を追求	格差を生む、環境破壊する、限界無視
民主主義	多くの意見を尊重	独創的な少数意見は敬遠される
自由主義	束縛されることを嫌う	他の人の自由とぶつかる
合理主義	理屈で説明する	理屈で説明できないものがある (命の大切さ)
個人主義	自分を大切にする	他の人への配慮ができない、自分中心
法治主義	法に従う	法を作れば何でもできる
平等主義	差別が無くなる	違いを認めなくなる
功利主義	利益や利便性を求める	大切なことは他にもある

物事には二面性があるので、そのバランスを取らなければならない。人間は万能ではないから真に正しいことや良いことは分らない。科学の世界では理論はすべて仮説であって、新しい事実が見つければ、簡単にひっくり返る。人には謙虚さが必要である。

不祥事の多発の背景には、これらの思想の限界が関係しているように思われる。例えば、議論の仕方。議論と論争の区別がなされず、議論すべきところを論争してしまう傾向がないだろうか。論争はどちらが正しいかを争う。それに対し、議論はより良いものを求めて考えをぶつけ合う。AかBかではなく、C (よりよい解) を求める。なぜ、それができず論争になってしまうのか。論争へ向かってしまう基底に**個人主義**の浸透があるのではないか。個人主義は自分 (の考え) を大切にする。行き過ぎると自分の考えが正しいと思いつつ、違う意見に出会うとそれを否定して自分の意見を通そうとする。それで論争に向かってしまうのではないか。論争では進歩がない。違う考えを持つ者が協力してよりよい解Cを見つけるべく議論をし、真の原因追究とその除去に尽力すれば不祥事は減り、社会は前進できるはずである。世の中がとげとげしくなっている基底に個人主義や自己主張の問題、更にそれが進んだ利己主義があるように思われる。思想は当然のことながら仕事の仕方に影響する。

もう一つ、不祥事で取り上げた⑭無差別殺人。これは**個人主義**が高じた独善だけでなく、**自由主義**、**合理主義**、**功利主義**などいろいろな思想の負の面が出て来た結果ではないだろうか。日本人は本来、「生かされている」という**感覚**をもって生きてきた。それがいのちの尊さや謙虚さなどの生き方につながっている。今この感覚が失われた付けが出て来ているのではないだろうか。

現在に閉塞感があるとすれば、それはいろいろな**思想のバランス**が崩れ**限界**が現れてきたためではないだろうか。人新世的に考えれば、現代は考え方の転換時期なのであろう。

4 SDGs への期待と限界

SDGs は ISO 同様に世界の知恵を集めて、世界のあり方を明確にした。ゴールへの道筋に言及していないが、人類の目指す姿、**ゴールを明確にした画期的なもの**である。

しかし、その根底に**発展を持続的に続けたいという成長志向**があるように思われる。現在の延長線上に未来の姿を見ている。しかし、それは可能だろうか。ISO が成長志向に阻害されたように SDGs も成長志向に阻害されないだろうか。限界を感じてしまう。

5 人新世への期待

それに対し、**人新世**は地球と人間活動の現実を見つめる。それは、このままでいいのか、という**危機意識**をわたしたちに投げ掛けて考えさせる。答えを示すものではない。ゼロベースでこれまでになかった**従来の延長線上から離れた自由な発想**で未来を考えさせる。2、3の例を挙げてみる。

1) 成長社会と成熟社会

先に Steffen らの調査した各種グラフを挙げたが (図-1,2)、それら地球の状況の右肩上がりカーブをみれば、その右肩上がり未来もずっと続くという発想がおかしいことに気付く。途上国に成長は期待できるが、成長には限界があり先進国は成長ではなく成熟社会を目指すべきであろう。置かれている状況により目指す姿が違って当然である。先進国は**人間の生き方を根本から変えなければならない**。先進国が手本を示さないと、途上国は先進国の二の舞になり、途上国は二番手の強みを活かさない。二番手にはトップランナーが苦勞したことを繰り返さずに先へ進めるというメリットがある。メリットを享受できるようにすることは地球を救うことに繋がる。人新世はそれらのことに気付かせてくれる。

2) 福祉社会と人のいのち

SDGs は未来の姿として 17 の目標を上げている (表-3)。

表-3 SDGs の 17 の目標

1) 貧困を無くそう	10) 人や国の 不平等 をなくそう
2) 飢餓をゼロに	11) 住み続けられる 街づくり を
3) すべての人に 健康と福祉 を	12) つくる 責任 、つかう責任
4) 質の高い 教育 をみんなに	13) 気候変動 に具体的な対策を
5) ジェンダー平等 を実現しよう	14) 海の豊かさ を守ろう
6) 安全な 水とトイレ を世界中に	15) 陸の豊かさ も守ろう
7) エネルギー をみんなに、そしてクリーンに	
8) 働きがいも 経済成長 も	16) 平和と公正 をすべての人に
9) 産業と 技術革新 の基盤を作ろう	17) パートナーシップ で目標を達成しよう

これにならって、人新世的にゼロベースで世界の取組むべき課題を考えてみる。例えば、**基準を「人のいのち」とする**。

A) 人の生存の脅威となるもの	いのちに対する危険度が重大なもの
B) 人の生存を困難にするもの	いのちに対する危険度が大きいもの
C) 人の生存の障害となるもの	いのちに対する危険度があるもの
D) 快適な生活を阻害するもの	いのちの質を向上させるもの

そこで、いのちの脅威になるもの、生存を困難にするもの、生存の障害となるもの、快適さを阻害するもの、に分けて課題を挙げてみる (A~D は厳密な分類ではない)。すると、

戦争のない社会、災害に対処できる社会、人口爆発、難民などの課題が出て来る（表-4）。

表-4 人類の課題

人類の課題	
A)	戦争、災害(地震、大雨、干ばつ、強風、火災)、感染症、
B)	難民、人口爆発、飢餓(食料、水)、差別、医療・福祉、
C)	気候変動、不平等・格差、貧困、
D)	エネルギー、資源、多様性・生態系、環境汚染・破壊、教育、 経済社会、都市開発、雇用、ジェンダー

これをSDGsと比較して見る。するとSDGsにはいのちの視点が弱い様に思われる。SDGsは持続的開発が基準である。基底に、先進国もさらに成長を続けたい、途上国に早くそのレベルになってほしいという願いがある。同じ線上に並ぶという思想があるように見える。発展ではなく「いのち」も世界の未来を考える基準になりうる。基準が違くと見える世界が違って来る。

今、世界で戦争が多発している。SDGsは、貧困を無くそう、飢餓をゼロに、と言えたが、戦争を無くそう、と宣言できなかつた。「平和をすべての人に」が精いっぱいのことだった。現状の延長線上には戦争が待っている。皆がどこかの国が攻めた来たらどうするかという脅迫と恐怖に怯えて戦争の準備をしている。人はその恐怖に耐えられないから戦争するのだろうか。戦争の準備は本当の戦争を呼び込む。発想を変えなければならない。脅迫と恐怖を越え、人間の知恵を人を殺すことではなく、争いを無くすことに使えないものか。悲惨な戦争を無くしたいと平和を口にしながら、人を殺すことから目を背け戦争をする矛盾。その矛盾を抱える人間には解決は無理なのか。定義から考え直してみる必要がある。

平和主義：軍備によらない平和的手段で自国の存続を図る。

軍国主義：軍隊で自国の存続を図る。軍国主義は戦争礼賛ではない。

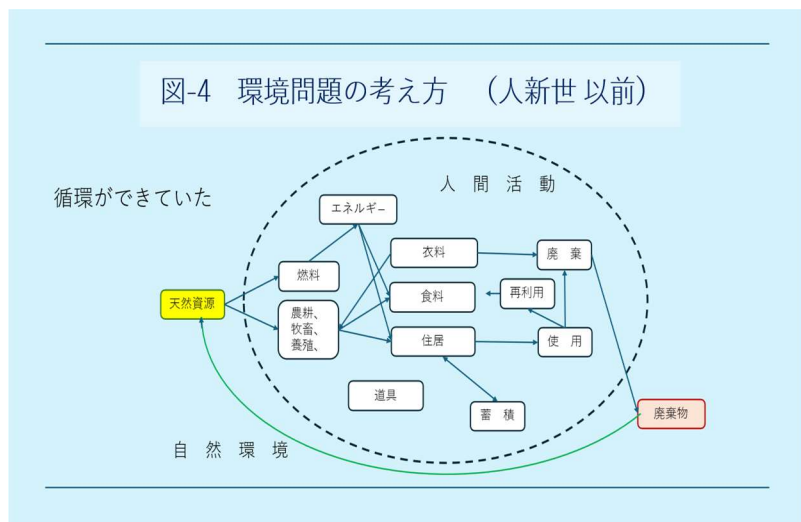
今日本は軍国主義に向かっているが、核兵器の時代、戦争を続ければ人類は滅亡する。人間が地球上で自滅する最初の生物になる怖れがある。人新世はそんなことを考えさせる。平和的手段は、いざとなったときに使うものではない。いざという時が来ないように、不断の相互理解を深め平和共存の道に全力を尽くすものである。友好関係だけが戦争抑止力になる。現在の軍隊はそれまでの繋ぎの役割と考えるべきで、繋ぎ役に主役の座を渡してはいけない。

3) 環境への取り組み

地球を「人間活動」と「自然系」の二つに分けて考える。そして「人間活動」を一つのプラントとする。

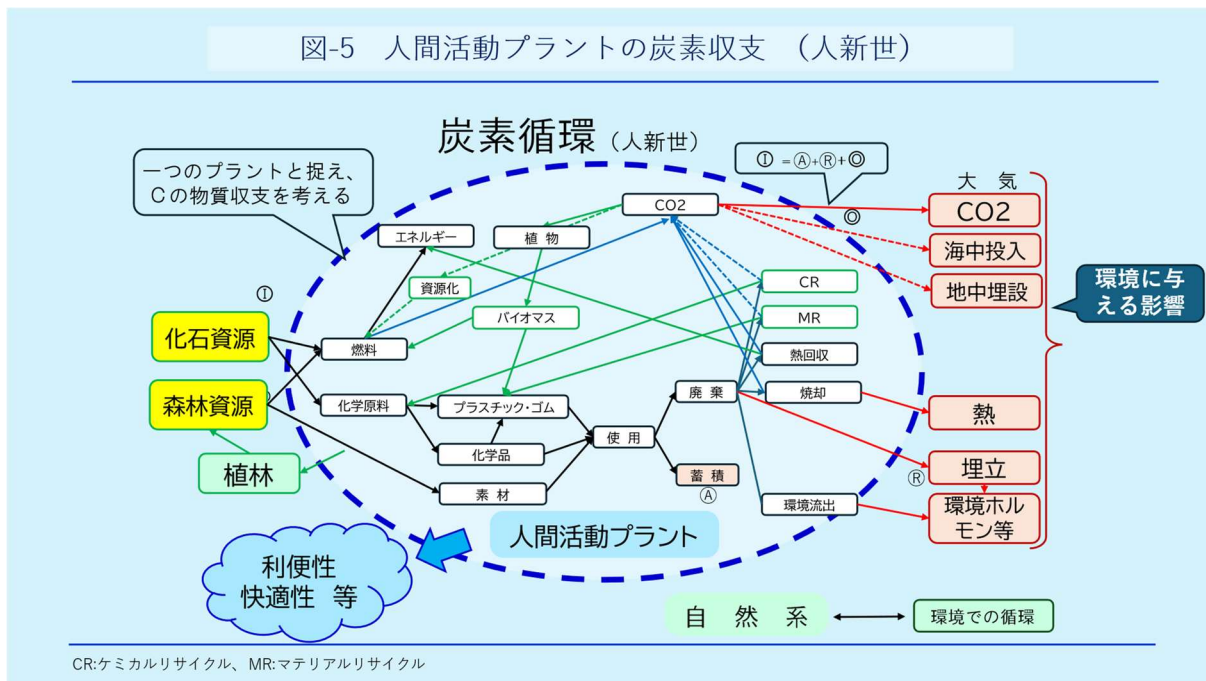
人新世以前、このプラントは外界から天然資源を取り入れ廃棄物を出すというシンプルなプラントであった。廃棄物は自然系の中で天然資源へと循環していた(図-4)。

人新世になって人間活動プラントは利便性と快適性



という製品を追求し続けた。そのために天然資源を使い、多量の廃棄物を出した。気付くと、使う資源と出す廃棄物は自然の循環能力を超えてしまった。このままでは人類は地球を破壊するかも知れない。人新世は考えさせる。

地球温暖化が問題の今、人間活動プラントでの炭素の物質収支を考えてみる（図-5）。



このプラントの原料は化石資源と森林資源。利便性や快適性を生み出し、出て行く物は廃棄物と炭酸ガス。森林資源は植林により一部循環ができる。

ゼロエミッションは炭酸ガス排出ゼロにしようということだが、化石資源を使いながら（インプット削減目標無しに）排出炭酸ガスゼロで炭素収支はバランスするだろうか、素朴な疑問である。取り入れた炭素はどこへ行くのか。ゼロエミッションを達成するには、出口である排出炭酸ガスを減らすことだけでなく、入口の化石資源の使用量を減らす目標設定をまず考えるべきではないのか。そして、減らすために何をすればいいのかをこれからの課題とすべきではないか。植林に関連して IPCC の「土地関係特別報告書」³⁾ が 2020 年にまとめられた。そのデータを参考に、植林－土地利用、再生可能エネルギー、核融合などを考えていくべきと思われる。原子力、火力発電はそれまでの繋ぎだろう。長期的目標、短期的な手段、それらを組み合わせて社会変革を進める。人新世は発想の転換を求めている。

6 おわりに

不祥事を無くすには基本がキチンと出来るようにならなければならない。その場合、利益追求の成長志向が足かせとなる。人新世の時代、仕事の基本や考え方の基本に陰りが見える。日本人は明治開国以来、欧米の帝国主義や経済競争の渦に巻き込まれてしまった。本来、生かされているという感覚で落ち着いた生活を営んできたのだが、欧米文明の勢いに押され落ち着きを失ったのではなかろうか。人類が発展を続けるのではなく、生存を続けて行くには、日本的な考え方で、成長志向や軍国主義ではなく、成熟志向、戦争廃絶、循環可能資源の活用などに目を向け、ゴールを描きそこへ向けて今からの行動を考えていく必要がある。知的体力（自ら考える力）を付けねばならない。課題は広範であり、専門分野を超えた連携が必要であろう。蚕の細い糸も撚り合わせ編み上げれば素晴らしい織物

になる。人新世の地球規模の思考で知恵を結集し、発想の転換を進めたい。

参考資料

- 1) SDG s、外務省訳（2015）、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf>、
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000270935.pdf>
- 2) Steffenn W. et al.(2015) The trajectory of the Anthropocene: The Great Acceleration.
The Anthropocene Review. 1-18
- 3) IPCC「土地関係特別報告書」の概要、環境省（2020）、
https://www.env.go.jp/earth/ipcc/special_reports/srccl_overview.pdf